

随想

日本の教育はこれで良いのか？

低すぎる小学校教諭の社会評価

(株) P P Q C 研究所 加藤 宏光

先日中学生の自殺(岩手県矢中町の中学二年生・村松亮君の事件)で、学校と教師のあり方に注目が集まっている。列車に飛び込み自殺したと見られる中学生は担任教師と交換日誌を介して繋がっていたはずなのに、生徒が死に追い込まれた可能性が高いとされている「イジメ」を感じられなかったことが大きな波紋を呼んでいる。

確かに日誌を追いかけると、生徒がイジメを苦にしていたことが読み取れる。しかし、教師の対面する日々の表情と日誌の内容に乖離があったために、生徒本人の内面に気付けなかった、と報道されていた。

一九九七年にP H P 文庫から出版された「経済は権力に勝つ」

という随筆集がある(日下公人著)。この最終章に「教育過剰の国」というタイトルで、日本の教育についての記述がある。二〇年近く前の論評を今の時代に併せて考えてみた。対比のために、概略を紹介しよう。

『過剰な教育神話のため、教育過剰で育った人が教育過剰をいうことはない、といわれる。日本は世界一の高学歴国になったから、日本の教育過剰について疑問を呈する人もいない。教育の長所と短所を挙げると

- ①教育は良いもの
- ②教育は多いほど良い
- ③教育はその人のためになる
- ④教育は国家・社会のためになる

- ④教育充実は親や国の義務
- ⑤教育で人の能力・人格は向上
- ⑥教育は先生が行う
- ⑦教育は学校が行う
- ⑧正しい教育内容はあらかじめ決まっている
- ⑨しっかり教育すれば誰でも勉強ができるようになる

(中略)

たいていの人は最終的には「教育はまだ不十分」と思っている。その証拠に「大学を出ても役に立たない」という人は多いが「これ以上大学を作るな」と明確に主張する人はいない。母親も「勉強せよ」「宿題したか」と聞くが、同じ時間でもっと有益なことを学び、立派な人になれる…とは考えない

らしい。これは教育の側面《機会損失》であり、明治・大正には日本人の九〇%が小学校、高等学校卒で(高等)教育による機会損失はほとんどなかった。

(中略)

今では(普及しすぎた教育のおかげで)教育普及の限界効用(※)はマイナスともいえる。

高校進学率を三〇%から三五%に上げるのと九五%を一〇〇%に上げるのでは、同じ五%でも意義が異なる。後者のために要するコストは前者に比較して大幅に多くなる。おまけに、五%ぐらいは勉強が嫌いな人がいる。このような人に教育を強いることで、その他の方向への適性を磨く機会を逸する、というデメリットも出てくる(以下略)

ここでは日下氏は高校進学率を例に取って、親の子供に対する無責任な対応へと論を進めている。著者は高校ではなく、大学卒の親と教師の問題へ目を向けたい。

古いことになるが、著者が仲人をお願いしたのは、小学校三年生の担任だった先生である。著者は三年生まで三重学芸大学付属小学校に通い、その後大阪府下の公立学校へ転校した。仲人をお願いした先生には一年のみ教わっただけであったが、生涯の恩師と思っている。戦後になつて、三重学芸大学を卒業したばかりで「新しい日本を担う若者を育てる」という夢に燃えて来られたことが、小学生にも伝わってきた。この先生は、その後いろいろな学校を経由して最終的には生まれた村の小学校の校長で退官された。

一方、以前に触れたが、著者の父親は大阪府立大学工学部の教授であった（その後請われて九州産業大学、共立大学の教授を勤めた）。

先に上げた先生は勲五等、父は勲三等の叙勲を受けている。世の人は疑問を感じないかもしれないが、恩師の最終が小学校校長で、勲五等、父が公立大学を経て勲三等（私立大学の場合勲四等と聞く）というのに、多少ならず疑問を感じてしまう。

勲章をどのように受け止めるかについては個人差があるとは思いますが、誤解を恐れず表現すれば、大学の教授の方が常識的には小学校校長より上等と社会が評価している、と考えるのも良かろう。

ここで「小学校の先生が大学の先生に劣る社会評価で良いものだろうか」ということを考えてみたい。今、小・中学校でモンスター・ペアレンツが問題になっている。給食費を子供に持たせず、給食を食べる権利を主張するような社会常識の欠如した親が、わが子を中心として食ってかかることが、教師を心理的に追い込んでいくという。こうしたことが問題になる一因には、とにかく教師の資格を取るのが容易で、待遇も恵まれない

ことがあると感じる。

正確には知らないが、現在の教授の年俸は一、二〇〇万〜一、五〇〇万円程度、准教授なら八〇〇〜一、〇〇〇万円くらいであらうか？ 小学校の校長では、およそ一、二〇〇万円と聞いている。初任の小学校教師なら年俸にして三七〇万円、大学の助教（古い呼び方なら助手）もほぼ同様である。

もし、小学校の平教師の報酬が二、五〇〇〜三、〇〇〇万円、校長なら四、〇〇〇万円と決められていれば、必ず極めて優秀な人材が、それこそ多数応募してくるはずと信じる。そこから学業だけでなく、子供という国の宝を育むに十分な資質を持つ人物を任用すれば、そして彼等は子供を宝として心身共に健康に育てることは間違いあるまい。また人品が尊敬に値すると社会が認めた教師を、親たちが見下すことなどできようはずもない。

著者が小学校の学童、中学校の生徒であった時分、同期の学

童・生徒の親、誰一人として先生を馬鹿にしたり、見下したりしなかった。何か先生に叱られてもすれば「お前が悪い。先生の言うことをよく聞きなさい」と等と注意された。昔の親は「先生」を特別な存在と受け止めていたからである。最初に述べたように、親の時代の大学進学率は数%であったろうから。それに比較して現在では大学進学率は全国レベルで五〇・八%（二〇一三年度）にも及ぶ。学卒者は普通人であり、それだけで尊敬されるほどでもない。

仮に先に述べたほどの社会評価をされるのが小学校教師資格であれば、社会全体が小学校教師を敬い「子供達を任せるに足る」と感じるであろう。六歳から十二歳まで十分な情操を伴った教育を施された子供達は、まったく異なった感性の育ち方をする。大事な子供の時期を過ぎた頃から矯正に大わらわらなっている現在の教育観念に、大いに不満を感じている。

※ 限界効用：物やサービスを1単位追加消費して得られるメリット。高校進学率を30%から35%に上げるのと95%を100%に上げるのでは同じ5%でも意義が異なる。後者のために要するコストは前者に比較して大幅に多くなる。これを限界効用が下がる、と表現する。